

長引く不況やリストラなどで働くすべを失った大人たち。一方、学校や家庭等の事情から不登校やひきこもりとなる子どもたち。全国では現在、様々な理由から「行き場をなくした」人たちがいます。今回の特集は、こうした人々たちと「共に生き」、「共に支えあう」活動に取り組む事例をとりあげ、活動の経緯や内容、ボランティアとの関わりについて紹介します。

“おっちゃん”と共に明日を生きる

夜廻りの会・廿日市 広島県廿日市市

サークルへの資金提供から、物品配布の直接支援へ

昨今の社会状況に伴う雇用条件の悪化や失職、病気やケガ、家庭の問題等により、野宿生活を余儀なくされた人々は、全国で約2万人(厚生労働省調べ/平成11年10月現在)。広島県内では、広島市の207人を筆頭に、福山市54人、廿日市市4人ほか、計271人の野宿生活者がいると言われている(広島県庁調べ/平成13年現在)。

平成8年に誕生した「夜廻りの会・廿日市」は、ある一人の主婦の想いから生まれた個人サークルである。

さかのぼること昭和61年12月、「野宿生活者と公共施設の使用を巡るトラブル」が掲載された記事を読んだ主婦は、厳冬の中、空腹や孤独の中を生きる人々を案じる想いから、ある野宿生活者支援サークルに会費等の資金提供を始める。その後、10年間継続して会費や薬品提供等を行っていたが、支援サークルが冬季限定の活動であったこと、自分自身は実際に当事者と顔を合わせないことに疑問を感じ、自ら現地に行き継続的に支援することを決意。

そこで、当時、大学受験が終了した娘と夫を誘い、手作り弁当をはじめとする物品配布の活動をスタートした。

生活相談など、自立支援も行う

活動は毎週土曜日、廿日市市を出発点に広島市内、他市町も含めて31カ所を巡回する訪問支援。具体的には、弁当の配食を中心に、衣類全般、石鹸、タオル、靴やバック、ティッシュペーパー、裁縫道具などの生活必需品から、医薬品まで様々な物品配布を行っている。

また、野宿生活者への生活相談や医療相談、日中は福祉事務所や病院、警察や裁判所への同行のほか、新居に移ることにな

った方の荷物の搬入などの自立支援と、その内容は多岐にわたる。一方、野宿生活者の多くは、職場を失った「おっちゃん」たちが、行政からの福祉サービスを利用したくても制度上利用する資格を持たない障害者や、最近では家庭の中で居場所を失った若者も増えているという。

当日は、支援物資をワゴン車に積み、夜8時30分に出発し、活動を終えるのは翌日午前1時になることもしばしば。配食Vに参加するボランティアの中には、自身が「ひきこもり」の悩みを抱える若者もいたが、同世代の野宿生活者と接することで次第に心を開くようになったエピソードもあるなど、野宿生活をしながらお互いに支え合う姿や「おっちゃんたち」の笑顔が活動の何よりの励みにつながっている。

全国に広がる支援の輪

弁当は毎回180食。弁当づくりでは、野宿生活者の栄養摂取を第一に、自家栽培で取れた野菜など、最低14品目の材料を入れるよう心がけている。主食となるお米は実に16kg。一昨年から無料で借りられることになった公民館で作業を行っているが、「おっちゃん」や地域の方もボランティアとして参加している。また、配食の際には、手を握りながらの健康チェックや、会話を通しての安否確認なども欠かさない。

これまでの活動を通して、東京・台東区の支援グループとの関わりも生まれ、昨年は台東区の野宿生活者が作った漬け物が届いたり、そのグループを縁に、長野県の農家から卵や野菜が送られるように。さらに、以前からボ

ランティアや支援企業を紹介してきた社協Vセンターだが、ホームページ上で同会の取り組みを紹介したのをきっかけに、北海道からも物資が届くなど、「おっちゃん」への支援の輪は全国各地へと広がっている。



さあ、お弁当と暖かいおみそ汁をどうぞ!

愛情込めたお弁当の完成です。



「ありのまま」で共に生きる場

東京YMCA “liby (リビー) 東京都新宿区

様々な分野からの大人が集まり、子どもたちの居場所づくりを検討

文部科学省が実施した平成14年度学校基本調査によると、不登校の小中学生は全国で約14万人で、平成3年の調査開始以来、10年連続して増加し続けている。

こうした社会課題と新たなプログラム開発を進めていた東京YMCAでは、平成8年から「不登校懇談会」、翌年には「いじめ・自殺防止を考える会」を設け、小児精神科医や音楽療法士、学校教員や公務員など、実際にいろいろな立場で子どもたちと関わっている大人が集まり、委員会を結成。

様々な角度から議論を重ねた結果、学校や家庭、あるいは社会が、「大人の価値観を求め過ぎる」あまり、「子どもたちは窮屈になり、居場所を失っている」との共通認識が示された。そこで、子どもたちが「ありのまま」で居られる場所を創ろうと、平成10年よりオープンスペース“liby”(let it be at the YMCA of Tokyo)の活動がスタートした。

子どもも大人も「共に生きる場」が必要な時代

不登校の子どもたちの居場所づくりが発足のきっかけではあるものの、“liby”を訪れる子どもたちは不登校だけでなく、障害と健常との「ボーダー」といわれる子やフリーターもいれば、学校が終わってから学童保育として利用する子どももいる。つまり、「ありのままの場所」とは、「誰かを支援する場」ではなく、「共に生きる場」というのが“liby”の考え方。また、子どもだけでなく、居場所を失った20才を越えた青年や大人を対象とした取り組みも進めている。

1. オープンスペース 平日正午～20時

新宿区社協の協力での程、2階建て民家に移転。一階部分は、子どもたちが自由にくつろぐ「こたつの部屋」、絵や工作を行える「創造の作業部屋」や「台所」。2階には、「テレビゲームの



TVゲームに夢中です。



食事づくりのボランティア募集中!

時にはスタッフが、子どもから教わることも!



部屋」やパソコンのある「ネットスペース」など、小学生から20才までの子どもたち約40人が、好きな部屋で自由に活動できる「たまり場」となっている。

また、スタッフとボランティアが分担して、通信制高校生のレポート作成や、学校授業の復習、受験などの「学習サポート」も実施。ほかにも、フラワーアレンジメントや料理教室など、子どもたちからの発案に合わせて各種講座を行っている。

2. ペアレンツクラブ/親の会 月1回開催

オープンスペースに通う子どもの親や不登校の子どもをもつ親など、家庭や地域の中で相談できず孤立する母親が集まる場。基本的には、息抜きのためお互いに意見交換を行うものだが、ピアカウンセラーを講師に招き、お母さんの投げかけに対し、コメントを添える勉強会も定期的を実施している。

3. URA-liby(ウラリビー) 月2回/18時～20時

オープンスペースは参加費が必要で、毎日訪れることが基本になっているのに対し、仕事を持たずひきこもったり、毎日は参加したくないという20才を越える人々を対象とした集いの場。

現在の参加者は約10名。当日は、参加者から出されたテーマに対し、皆で議論しあったり、ゲストを招いてお話をうかがったりしている。

子どもの興味を広げることが大切

“liby”の活動を支えているのは、3名のスタッフと20名の委員、並びに女性だけで構成された応援団、20名の東京たんぽぽYサービスクラブの方々。ボランティアについては、社協Vセンターの紹介をはじめ、季刊誌やホームページ、講座やイベント等での呼びかけを通して、現在約15名が「子どもたちとの遊び」「夕食作り」「学習サポート」などを行っている。

“liby”では参加者同様、ボランティアも自由に参加できるが、たとえ一生懸命に子どもたちと接してみても、子どもたちが心を開くとは限らない。大切なことは、いかに子どもたちの空気をキャッチできるかどうかであり、頭で考えるのではなく心で対話できるかどうかである。

そのため、ボランティアには学習技術やV経験よりもむしろ、V自身が「子どもたちに共感して、その興味を広げることのできる世界」を持っていることが求められる。

子どもも大人も「ありのまま」の自分を出すことを通して、「共に生きる」。それが“liby”という場所である。

「支援」の関係から、「共に生きる」関係へ

前ページで紹介した2つの取り組みにおいて、それぞれの代表または中心となって活動を行っているスタッフにお話をうかがいました。

たくさん頂いた内容の中から、ここでは、「取り組みに対する思い」、「活動を行ったことによる変化や効果」、「活動の現状と今後の抱負」などについてまとめました。



夜廻りの会・廿日市
代表 米田和子さん

**市民に向けては、野宿生活者への正しい理解。
行政に向けては、さらなる支援を呼びかけていきます！**

野宿生活者の多くは、働かなくても職業のない「おっちゃん」ですが、広島県の場合、福祉サービスを利用できない知的障害や身体障害のある方も多く、近頃では若者も増えています。つい先頃も広島市で野宿生活者の凍死者が出ましたが、寒さに震えながら生活せざるを得ない方々を思うと本当に胸が痛みます。

娘と夫を誘って活動を始めたのが平成8年冬のこと。当初、私たちが声をかけると驚いた顔して身構えていた「おっちゃん」も、今では「ご苦労さま」と、新しいボランティアさんもどけ込める明るい表情で応えてくれます。その意味では、こうした活動が根付いてきた証なんだと実感します。

一方で、講演先で聴講生に「野宿生活者について」のアンケートを行ったところ、「仕事をしない怠け者」などの意見が大半を占めていました。このように、野宿生活者に対する社会の偏見は未だ強いのが現状で、毎週土曜日の物品配布と日頃の活動以外にも、お誘いがあれば講演会等にもできる限り参加し、こうした誤解や偏見からくる差別を改めていきたいと考えています。

幸いに広島市では、旅館を開放し、そのための資金提供もするなど、野宿生活者の自立に向けた支援を積極的に行っていて、数年前に比べて野宿生活者も減少しました。私としては、さらなる要望として「冬季限定の一時宿泊所」を設置していただきたい。実際、市内を廻っていると空き家になった公共の建物も多いですし、せめて夜間だけでも開放していただきたいとお願いしています。また、福祉サービスを利用できない、一人ではアパートに入れない・暮らせない障害者を受け入れてくれる「グループホーム」を、それぞれの地域の中に作ってほしい。そして、「仕事」、「おっちゃん」の多くは「働きたいくない怠け者」ではなく、「働きたいけど職のない真面目な」人たちです。緑地帯や公園の清掃、保育園の砂場の掃除など、「おっちゃん」たちにどうか仕事をさせていただければと思います。

ここまで何とかやってこれたのは、家族やボランティア、地域の人々の協力と、野宿生活者から頂いたたくさんの「ハート」があったから。これまで出会ったこれらの人たちは私の「宝物」、共に明日を生きる「兄弟」なのです。

子どもの問題と大人の問題はリンクしている。 当事者活動だけでなく、社会の意識も変えていきたい！

東京YMCA・“liby”
ディレクター 秋田正人さん



“liby”が開設して、丸4年が経ちました。その間、延べ約120人の子どもが参加し、そのうち70人～80人が巣立っていきました。実際、ボランティアさんがいらしゃっても、最初は目を合わせなかったり、拒絶したりすることがほとんどですが、ある時、突然「関係」が生まれる時がきます。そうすると子どもたちは、凄い勢いでいろいろなことを話し始めます。この時の喜びが、ボランティアさんが活動を続ける原動力になっているのかもしれない。

「オープンスペース」には今なお、困っている人たちが手がかりを求めて訪れてきます。“liby”では、当事者への活動を行う一方で、社会に向けたメッセージを伝えていくことも必要だと考えています。例えば、中高年男性の自殺率が高くなっていますが、その根底には、彼らにとって「会社」が人生の全てという価値観に縛られていることが挙げられます。子どもたちにとっても「学校」が全てで、今の社会では、その枠からはみ出て生きていくのは難しいのが現状です。でも本当は、「仕事や学校だけが人生じゃないよ」「いろんな生き方があっていいんだよ」という価値観が社会全体の共通認識になれば、子どもも大人ももっと楽になるはず。

私たちは、こうした想いをより多くの人々に伝えるため「イベント」も数多く実施しています。ご存じのように、東京YMCAでは、様々な分野の方々の協力のもとプログラムを進めてきた歴史があります。“liby”にも、様々な専門家が委員として参加していただいている、イベントに際してはプロの演出家や歌手、映像スタッフなどが集まります。これによって「質の高いイベントづくり」が可能となり、広く一般の方にも想いを伝えるチャンスが増えています。

現在の場所に引っ越してきてからまだ数ヶ月。地域に飛び出したことで、今後はより地域とつながり、地域と協働しながら、より豊かな社会をつくっていくことに一役買えればと思います。

<libyサポーター(支えてくださる方)募集中!>

協賛金 原則 12,000円/年
振込方法 できるだけ郵便局からお願いします
番号:00150-1-543447 名義:東京YMCA“liby(リビー)”
*通信欄に“libyサポーター会費”と明記願います。